健苗移植と水管理の徹底で活着の促進を!

1. 田植え作業とその後の管理

①田植えから活着まで

- ○田植え作業は、日平均気温14℃以上(中苗)、できれば最高気温20℃以上の温暖な日に行います。 最高気温15℃以下の低温時や強風の時は見合わせましょう。平均14℃以上となるのは、平年であれ ば5月17日以降(アメダス平年値より)です。極端な早植えは控えてください。
- ○植え付け本数は4本/株程度とし、3cm以上の深植えにならないようにしましょう。
- ○田植え直後は、活着を促進させるため、水深4cm程度の湛水状態として保温に努めましょう(苗の 活着には4~5日かかりますが、気温・水温が高いほど早くなります)。

②分げつを促進させる水管理

- ○高品質・良食味米の生産技 術として強勢(初期)分げ つの確保が重要です。分げ つを促進させるためには、 水温の日較差を大きくする ことがポイントとなります (分げつの発生最適条件は、 最高水温30℃、最低水温 15℃、日平均水温23~25℃ です)。
- ○「早朝かん水・日中止水」 を基本に、気温が15℃以上
- 基本的な水管理体系 無効分げつ抑制 〔低温時深水〕 深水 間断かん水 分げつ促進 又は 間断かん水[高温時掛け流し] 深水 中干し 浅 水 湛 水 移植 活着 幼穂形成期 減数分裂期 出穂期 9葉期 〔落水は出穂30日以降〕 7月15日頃 7月25日頃 6月下旬 早期茎数確保・ 稲体強化一 登熟促進• (還元防止) (根の活力維持) (根の活力維持)
- の場合は浅水管理、15℃以下の寒い日は深水管理としましょう。
- ○アオミドロや表土はく離等が発生した場合は、早朝や降雨日に水の入れ替えを行い発生を抑えま しょう。

3雑草防除

- ○発生草種および雑草の量に応じた薬剤の選択と適期の使用により、効果的な雑草防除を行いましょ う。
- ○除草効果を高めるため、一発処理除草剤は「代かき日から10日以内」に使用します。代かき~移植 までに10日以上かかる場合は、移植後の初期除草剤と一発処理剤の体系処理を検討してください。
- ○除草剤散布時の水深は、粒剤では3~5cm、フロアブル剤やジャンボ剤では5~7cmとし、薬剤が 散布しやすいようにします。
- ○除草剤散布後7日間は止水とし、排水路への落水やかけ流しはしません。田面が露出すると効果が 低下するため、水が少なくなってきたらゆっくりと入水します。

病害虫防除

①いもち病防除の徹底と補植用余り苗の早期処分

本田の葉いもち病を防ぐことで、穂いもちの被害を未然に防ぐことができます。以下の点に注意し て葉いもちの発生を予防してください。

- ○育苗中に葉いもちが確認されたハウスの苗は移植しない。
- ○本田葉いもち防除は、箱施用剤、側条施用剤、水面施用剤のいずれかで必ず実施します(育苗期い もち防除剤として育苗ハウスで使用したベンレート水和剤やビームゾルは、本田まで防除効果は持 続しません。 嵐剤等は、耐性菌が確認されているため使用しません)。
- ○ほ場に放置された補植用の余り苗は、葉いもちの強力な伝染源になるため、補植終了後は水田の泥 の中に埋めるなどして、完全に処分してください。



